

龜山本徳寺に見る中世寺内町の遺構・遺物

太鼓楼（指定文化財）

（構造形式）下層正面三間・側面四間、上層方二間、上下層とも入母屋造、本瓦葺。

（細部手法）望楼形式の城郭の隅やぐら風の建築で、外観は二重である。一層の平面は前後に二分し、前は板ばり、後は土間である。軸部は方柱で、組物を欠く。上層は方二間で、しっくい塗込めで、柱間装置は、腰長押・内法長押間に連子入りの花頭窓と格狭間を置く。

（備考）中世の自治都市寺内町は環濠防衛の必要から要所に見張り台を置いていた。この施設は近世に再建されたものであるが、中世当初の景観をとどめている。外観は二層であるが、内部は三階の構造を持ち、最上階には太鼓を設けている。太古は当時の重要な情報伝達装置であった。このような機能性のある建造物が宗教的意匠を持ち、日本建築の美意識の形成に影響を与えることになる。近世の見せる城郭美はこの太鼓楼の影響を受けていると云われている。



本徳寺・太鼓楼（修理後）

英賀御堂梵鐘（指定文化財・大広間中庭設置）

1566/5 英賀長衆三木一族の宗大夫慶栄が寄進

播州飾西郡英賀東 / 本徳寺常住鐘 / 右志者为母妙秀十 / 七回忌報恩奉鑄之

願主同仮屋村住三 / 木宗大夫入道慶栄 / 招請同行加力而令 / 寄付之而已

時永禄九丙寅五月吉日 / 大工同国飾東郡 / 野里村五郎右衛 / 門藤原家久作之

鑄造製作は大工播磨姫路野里村五郎右衛門慰藤原安久の作とされ、当時、三木タタラとして優れた金属鑄造技術があった。内部に鉄製の梁構造を持ちその上に青銅を巻いたもので、当時のハイブリッドな製作技術の研究が今後待たれる。



英賀御堂（本徳寺）・梵鐘

英賀御堂鬼瓦（指定文化財補助資料・大広間上段間設置）

1566/8/27 英賀の長衆三木宗大夫慶栄による寄進

『永禄九年八月二十七日播州英賀東瓦 大工之宗右衛門符作之龜倉橋又二』『三木宗大夫入道慶栄作之 龜倉橋又次郎』

当時の英賀町は、市場（交易）町としてまた寺内町として栄え、町屋（商人・職人）の数は四百七十～五百四十軒である。町屋は城館・御堂の造営と英賀攻略の軍備に関わるものが多く、木材商・木匠（大工）・瓦師・指物師・塗装などの建築・武具関係の職人が多かった。寺院の造営を始め、町内の神社などの建造は、この様な新興都市・英賀の文化や技術を基盤とした経済によって維持されていたと思われる。

これら一連の普請は本徳寺が一五六〇年の院家勅許以後の院家寺院としての形態を整える為の事業と思われる。この瓦の大きさから想定すると十間規模の本堂と思われる。当時、本願寺並びに地方の真宗寺内町が活発化する時期で、本願寺の門徒集団が高度な建築土木技術を持っていたことがわかる。



英賀御堂（本徳寺）・本堂下棟飾瓦